

いわゆる部活動の中学生の精神衛生に 与える影響

都 筑 等*, 高田 知恵子*, 関 谷 務**

*群馬大学医療技術短期大学部 **中之条病院
(1984年11月29日 受理)

Influence of so-called Bukatsudo on the Mental Hygiene of Junior High School Students

Hitoshi Tsuzuki*, Chieko Takata* and Tsutomu Sekiya**

*College of Medical Care and Technology, Gunma University,
Maebashi, Gunma 371, **Nakanajo Hospital, Nakanajo, Gunma
377-04, Japan

Key Words : Mental Hygiene

I はじめに

近時、児童精神科領域では、登校拒否児を〈学校の問題〉として、改めて学校現場に問い直そうとする傾向が認められる³⁾。これは、従来からの母子分離不安説、父親問題説などだけからでは対処しきれなく深刻な現状〉からの当然の帰結といえなくもない。しかし、そうであっても、ただ学歴偏重社会・知育偏重教育・偏差値教育・管理化社会への批判といったお定まりの題目ならべに終わったのでは実効がない。具体的に問題点を露にし、関連領域で議論し合うことが、登校拒否を含め、学校精神衛生全般に寄与するために必要と考える。

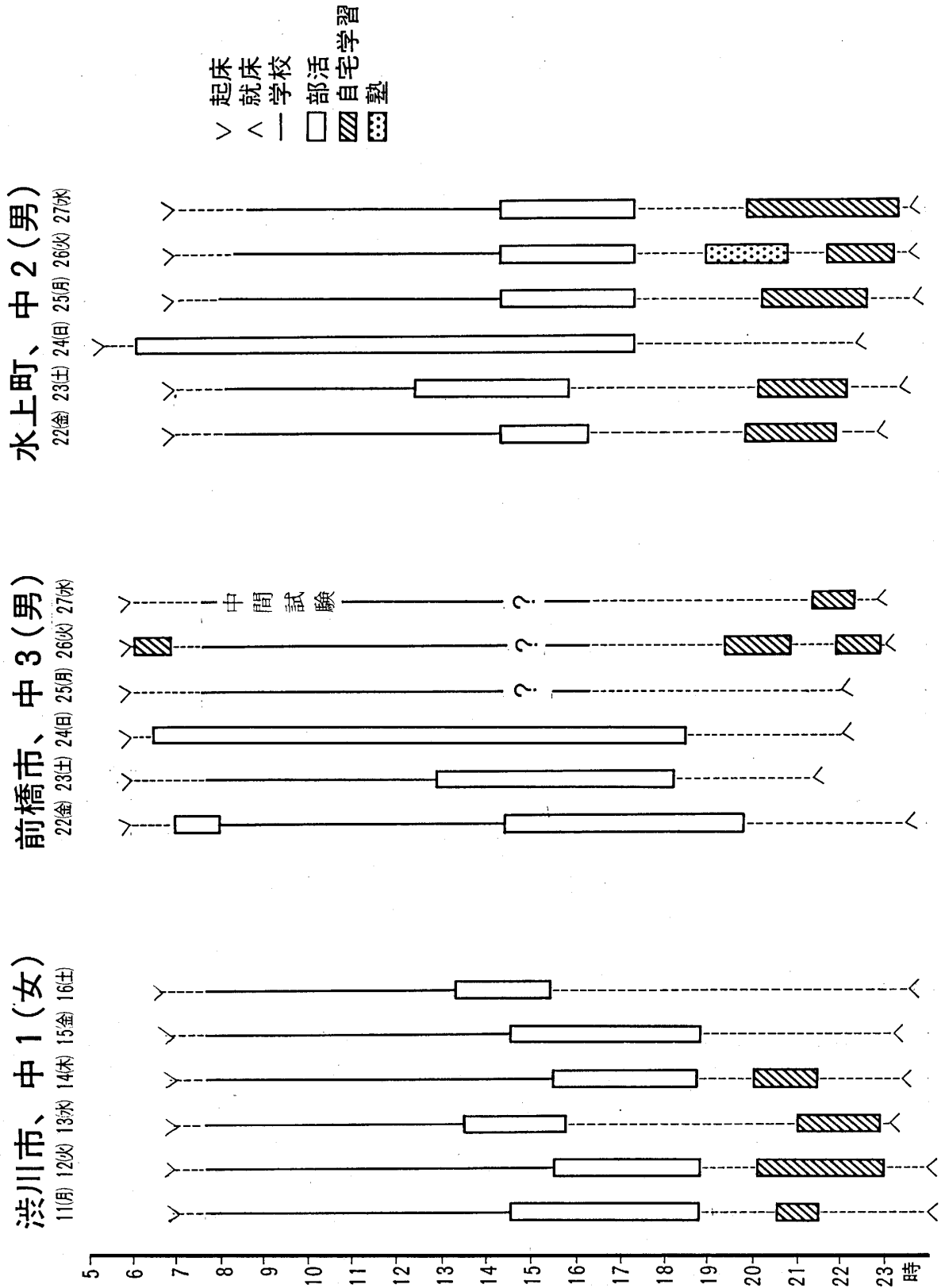
今回、われわれは、いわゆる部活動（以下部活と記す）の中学生の精神衛生に与える影響について検討した。研究の動機は、“部活不適応”が情緒障害の主因または促進因子となっている症例にかなり出会ったからである。本稿では、研究結果の一部を報告する。

II 中学生生活にしめる部活の割合

図1は、われわれが昭和59年6月に行った中学生の生活実態調査予備調査のなかから、3人のごくふつうの中学生の生活をとりあげ、略図化したものである。母親が観察記録したもので、本人には知らせていない。3人はいずれも群馬県下の公立中学校に在学中で、左側に示した中1女子はテニス部、中央部の中3男子は野球部、右側の中2男子は剣道部に所属している。中学生の生活は、①学校の正課の授業、②部活、③夕食前後の学習以外の家庭での生活、④自宅学習、⑤睡眠に大別される。このうち部活は睡眠時間を除いた活動時間の20～40%をしめ、日曜日はさらに高い割合となっている。なお、3人の家族は少なくとも子どもの教育に無関心な方ではない。

図-1 中学生の生活

昭和59年6月に調査したもの。いずれも本人には調査については知らせず、母親が観察記録したものにもとづいて作成した。



Ⅲ 部活不適應の臨床 ——— 自験例から ———

筆者の1人都筑は、過去3年間に直接診察した約70例の情緒障害例（神経症圏のもの）のうち、部活での問題が発症の主因または促進因子となった14例（20％）を経験した（第1表）。問題点として、先輩や同輩との人間関係のつまずき、役割上の不満や混乱、顧問教官への不満、学業との両立困難に大別された。反応様式として、不登校、ヒステリー、強迫症状、対人恐怖などが認められる。特に、対人関係をめぐ

表一 自験例で部活動が主因または促進因子となって発症した情緒障害例。

S. P. : school phobia, H. Y. : Hysteria

	S. P.		H. Y.		Others	
	F	M	F	M	F	M
先輩や同輩との対人関係	●●	●●	●			
役割	●	○	●●●	●		●●
先生との関係		○			○	
勉強との両立		●				

● : 部活が主たる要因の者
○ : 他の要因もある者

る問題には学校恐怖と考えられる不登校が、レギュラーになれないなどの役割上の問題とはヒステリーが関連するようである。

Ⅳ 短大生による部活の廻行的評価

過去に部活を経験したものが、部活をどのように評価しているかを知ることは、貴重な示唆を含むであろう。短大生を対象に調査を行った。

1) 対象と方法

群馬大学医療技術短期大学部看護学科および衛生技術学科の1～3年生全員（358名）を対象とした。質問紙を配布し、無記名で、直接記入回答させた。

2) 結果

a) 調査率

302名から回答を得た。調査率は84.4％。

b) 学業成績の自己評価

中学3年次の“主要教科”の総合成績を5段階で自己評価させた。両学科各学年クラス別で平均値を求めると、4.32～4.80と算出された。中学時代はかなり優秀な学業成績を残した集団といえる。

c) 部活への参加状況

1年次入部した部に、3年次引退するまで、継続して在部したものが最も多く233名（77.2％）、次いで途中で転部したものの37名（12.3％）、退部してそのままになったものの22名（7.3％）、はじめから入部しなかったものの8名（2.6％）であった。

それぞれについての理由を、該当項目はいくつでも選べる方法で調査した。継続して同じ部に在部したものでは、始めた以上最後まで続けた方がよいと思った（55.8％）、友人関係が楽しかった（42.1％）技術的に向上した（33.9％）、なんとなく続けた（12.4％）、やめたかったが、先輩や同輩の非難がこわくてやめられなかった（2.1％）、家族のすすめでやむをえず（1.0％）などである。

中途転部者の理由は、興味が変った（32.4%）、身体的に無理だった（24.3%）、他部から誘われた（21.6%）、先輩との関係が悪くなった（11.0%）などがあげられた。

中途退部して、どの部にも属さなかったものの理由としては、先輩・同輩との関係が悪くなった（28.0%）、身体的に無理、他のことに集中したかった、興味がなくなった、がそれぞれ14.0%、家族の意向、勉強に支障をきたした、レギュラーになれそうもない、がそれぞれ9.0%であった。

d) 部活への参加時間

部活への参加日数/週、活動時間数/週、休日登校日数/年を調査した（図2, 3, 4）。週に6~7日参加したとするものが圧倒的に多い。時間数では、10~15時間/週、15~20時間/週とするものが最も多い。休日登校日数は平均50~60日/年である。ほとんど毎日と答えたものもある。運動部と文化部のプラスバンド部で休日登校が多い。

e) 学校の定期試験との関係

期末試験や中間試験などの学校の定期試験の何日前から部活が休みになるかを調査した。休みが全くない8.9%、前日のみ2.1%、2日前1.3%、3日前27.8%、3~5日前0.4%、3~7日前2.1%、4日前1.3%、5日前2.5%、6日前2.1%、7日前44.7%、14日前0.4%、不明および回答なし6.3%であった。学校のきまりで全部活が一斉に休むところ、部によってまちまちのところ、中間試験と期末試験とで日数の異なるところなど多様である。

f) 先輩や同輩との人間関係

先輩との関係では、〈よかった〉とするもの51.9%、〈苦勞した〉が39.0%に認められた。同輩関係では、〈よかった〉70.7%、〈苦勞した〉22.8%であった。（図5, 6）。

図-2 週当たりの部活参加日数

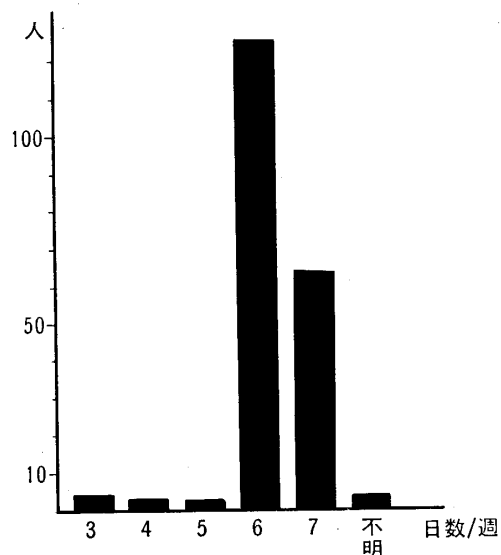


図-3 週当たりの部活参加時間数

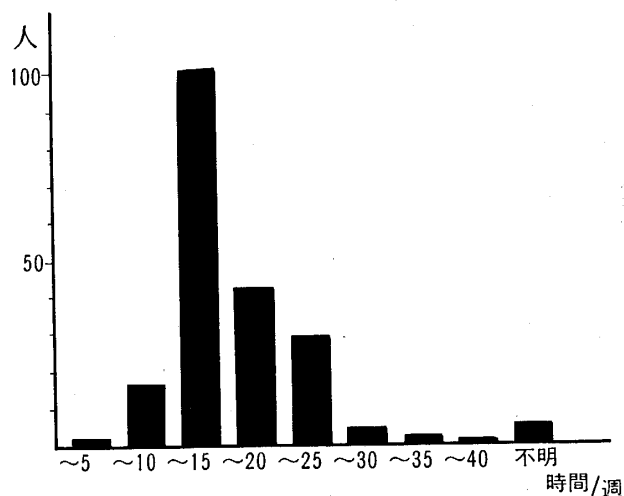


図-4 部活のための年間休日登校日数

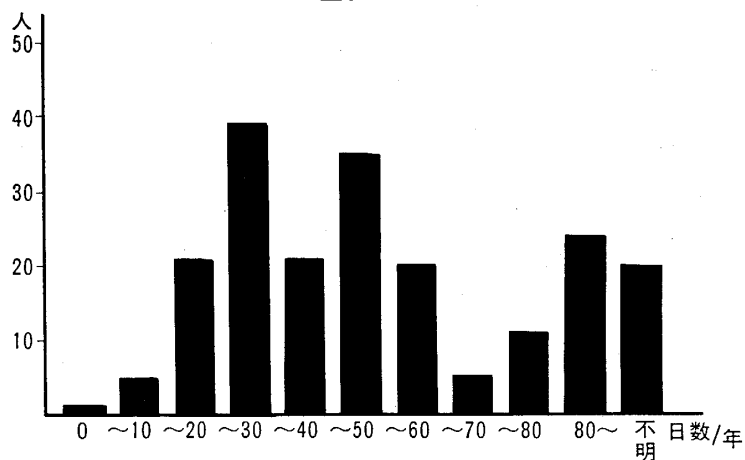


図-5 先輩との関係

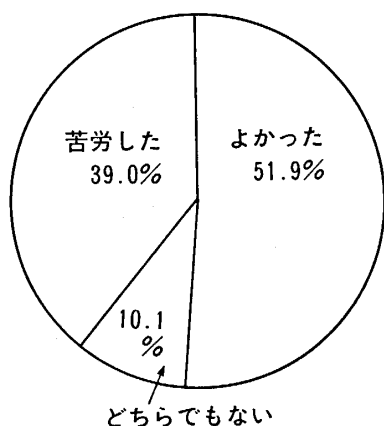


図-6 同輩との関係

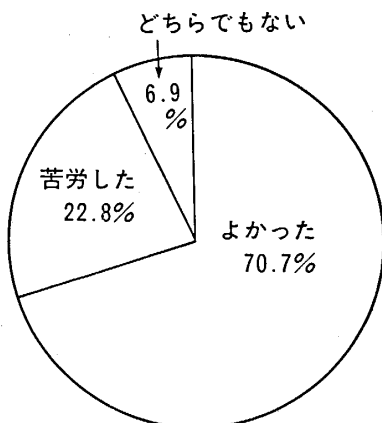
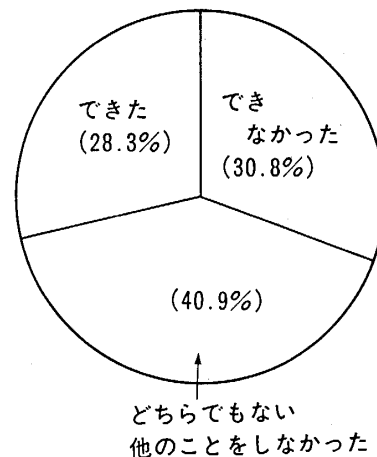


図-7 部話に参加していて、他に興味あること、したいことができたかどうかを問うた。



g) 他のことへの集中度

部話以外の、関心のある他のことに集中できたかどうかを問うた(図7)。〈集中できた〉28.3%、〈集中できなかった〉30.8%、〈他のことはしなかった〉、〈どちらでもない〉は合せて40.9%である。

h) 部話に対する意見・印象

ここでは自由に意見などを記述するよう求めた。部話を評価する意見・印象には、立派な顧問の先生にめぐりあえた、親友ができた、自分の成長にとって有意義だった、勝利の感激を知った、学習と部話が両立できて満足した、チームワークの大切さを知った、運動能力が向上した、レギュラーになって自信がついた、趣味ができた、好ましい体型になった、病気がなおった、などが認められた。一方部活への批判としては、先輩の理不尽な威圧、封建的な上下関係、部内の対立抗争、同輩関係がうまく行かず苦しむ、顧問の先生のやり方や性格に不満、レギュラー優先の部運営、補欠で差別され劣等感を抱きつづけた、体力に合わない過度の練習、第一志望の高校の受験に失敗した、などがあげられた。

V 考 察

いわゆる部活動は、課外活動とはいえ、なかば強制的に組織化され、中学生の生活の大きな部分をしめるにいたった。部活についやされる時間は、驚くべきぼう大な時間数に達し、かなりの部で、大半の日曜・祭日・休日がこれにふり当てられる勢である。この事実一つをとってみても、当然教育的関心ははられねばならないテーマといえよう。一方児童精神化に携わる者は、指摘した部活不適応群の存在に注意をはらうべきである。以下にいくつかの問題点を挙げ若干の考察を加える。

対人関係

中学時代は、もはや家族をこえて、とりわけ同輩・仲間との接触を通して人格を形成していく時期といえる。笠原ら¹⁾²⁾によれば、青年期前期は、同性同年輩者への親密さの要求に満ちた時代であり、仲間との妥当性確認が、その後の人格形成に影響をおよぼすという。また、その失敗は、青年期を通して神経症的病理の影を落しかねないことが示唆されている。

中学に進学し、部活に入部して、初めて先輩との出会いを持つとってよい新入生達は、特に運動部などでの絶対的ともいべき上下関係の社会に、突然放りこまれ、とまどう。短大生の約40%が先輩との関係に苦勞したと述べ、さらに数年を経た現在なお、理不尽な威圧・苦しい体験と感じつづけていることは注目される。学校生活において、部活内の人間関係が、クラス内同輩関係に優先する場合も十分考えられ、そのつまずきが学校恐怖症に結びついていくことは了解できる。

同輩との関係は、先輩とのそれにくらべて安定しているが、ひとたびこじれると、事は一層深刻になるようである。

画一性と個性

いまや、部活には一部で聞かれるように、社会的機能のあることは確かであろう。即ち、子どもに無駄な暇な時間を与えず、非行防止策とするなどがそれである。このことはしかし、一方で、未来の地平を切り開こうとする若者の個性の萌芽を抑える諸刃の剣になりかねない。

われわれは、アンケート調査で、〈他のやりたいことができなかつた〉と答えるものが、意外に少なかつたことに、いささか懸念を覚える。かれらが自らの個性を自覚することなく、青年期後期を迎えつつあるのではないかと…………。

先年、公立中学での英語の時間数を週1時間減じて週3時間とすることで議論を呼んだことは記憶に新しい。部活時間が週平均15時間を越えている事実と考えあわせると、何やら片手落ちの感がある。ちなみに、現在私立中学では、この倍以上の7時間の英語の授業が堂堂と行われている。公立中学に関しては、知育偏重とはいいいにくい。

これまでつづけていた〇〇をやめた、できなくなったという子ども、△△がしてみたいという欲求をもつ子ども、あるいは潜在的にそうした欲求のある子ども達がいるに違いない。課外活動である部活をそれらとどう調和させていくのがよいのか、検討さるべきことと考える。

役割上の問題

誰でもレギュラーになりたいと思って励む。一人秘かに練習することもある。時には策を弄することもあろう。あらゆる努力を傾けるのである。昔から、勉強なんてできなかつたって…………などと強がりはいえたが、いま部活なんてできなかつたってとは子どもにとっていづらそうである。アンケートの中にも、レギュラーだけが優遇される練習のあり方への批判や対外試合に1度も出してもらえなかつたなどの補欠の悲哀が表明されている。“知育偏重”のなかで落ちこぼれていく子どもとは別に、自尊心の喪失を生む土壌がある。

自験例にも、レギュラーになれそうになく、軽い足の捻挫をきっかけに、けいれん発作を起こすようになった生徒が、整形外科や小児科の病院に何回か入院したが治らなかつた例、部員まとめて苦勞した部長が、レギュラーに指名されず、日頃あまり協力的でなかつた同僚が選ばれ、転換・解離両型のヒステリー反応を起こした例など、役割をめぐる問題からヒステリー反応をみる症例は多い。

このような生徒に、もともとの性格が問題だ、親が過保護に育てた後遺症だ、結局は弱い子なのだどレッテルをはるだけではすまされない。上述のような問題が、子どもの精神衛生に深刻な影響を与え、ることを関係者は確認する必要がある。その上で、たとえ補欠に甘んじて、部活から何かがえられた、ひとつでも心から楽しい思い出がのこったと将来述懐できるように教育的配慮がなされるべきである。

関係者はこのことから逃げてはならない。

短大生のアンケートの中に、「部活に入って本当によい顧問の先生にめぐりあえた。今でもなにかにつけ相談にのっていただいている。」といった感動的なメモがある。他方顧問教官に対する批判もかなりみられた。子どもは、先生に注目し、期待し、頼りたいと思っている。

アンケートには、部活を積極的に評価するものも多数認められた。彼らは部活から糧をうることができたのである。スポーツは、本来参加する人に感動を生み、積極性を与える。合奏や合唱は深い感動と興奮をひきおこす。特に勝利の感激、優勝の感激は、彼らにとって至上のものとして体験される。しかし極端な勝利至上主義は、学校教育のなかに部活動偏重傾向を助長することとなろう。教師も生徒も日曜・祭日を返上して特訓しなくてはならなくなる。問題は、部活が学校教育のなかの他の部分との整合性を失っていることにあると考える。

Ⅵ ま と め

1. 現代の中学生の精神衛生に、いわゆる部活動がどのような影響を与えているかについて、生活実態調査予備調査の結果、臨床経験、短大生（302名）へのアンケート調査結果をもとに検討した。
2. 中学生が部活動につきやす時間は、週15時間、ほとんど毎日、休日も返上しているものが平均的であった。即ち、中学生生活のなかで部活動が大きな部分をしめることを指摘した。
3. こうした部活動のなかで、対人関係のつまづき、役割上の問題など、“部活不適応群”が認められる。これは不登校、ヒステリー反応の主因または促進因子となっている。
4. 精神衛生的立場から、部活について、対人関係、画一性と個性、役割上の問題を中心に考察を試みた。そして部活動が学校教育のなかで他との整合性を欠いていることに問題のあることを指摘した。

引用文献

- 1) 笠原 嘉：青年期—精神病理学から— 中公新書 中央公論社 1977
- 2) サリヴァン：現代精神医学の概念（中井久ら訳） みすず書房
- 3) 若林 慎一郎：登校拒否と現代社会（シンポジウム） 児精医誌 Vo.1. 25 No.2 78~97, 1984